GM 鶴牧-3 環の会

第 29 回クラシックを楽しむ会

2016 年 1 月 17 日（日）18:00～（30 分 ＋1 時間 17 分、休憩除く）

歌劇「オルフェオとエウリディーチェ」（グルック） 1762 年ウィーン版

会場等：チェスキー・クルムロフ城バロック劇場、グルック生誕 300 年記念制作映像
（チェコ、2013 年 9 月、10 月上演）
管弦楽：コレギウム 1704
合唱　：コレギウム・ヴォカーレ 1704
指揮　：ヴァーツラフ・ルークス
演出　：オンドジェイ・ハヴェルカ
振付　：アンドレア・ミルトネロヴァ
出演　：ベジュン・メータ　　（オルフェオ）
エファ・リーバウ　　（エウリディーチェ）
レグラ・ミューレマン（アモーレ）
その他

冥界に行き、エウリディーチェを探すオルフェオ

ものがたり

有名なギリシャ神話の物語。冥界から妻エウリディーチェを連れ戻そうとするオルフェオ。地上に出るまでは妻の顔を見てはならないという忠告に背き、不安にさいなまれて振り返ってしまい、妻はまた冥界に戻ってゆくという悲しい物語。

なお、このオペラは、オーストリアの女帝マリア・テレジアの夫フランツの命名式祝賀用オペラとして作曲されたため、結末は神話と異なりハッピーエンド。

チェスキー・クルムロフ城バロック劇場

世界遺産チェスキー・クルムロフ城は、チェコ南部、南ボヘミア州の小さな町クルムロフには不釣り合いに大きく美しい城である。

城内には、1766 年に完成したバロック様式の宮廷劇場が当時のまま保存されている。舞台下に本格的な機械仕掛けの舞台装置を備えている。

美術品のような書割、衣裳、見事なバロック・アンサンブルはまさにタイムスリップの感動。

豪華な貴賓席、質素な客席とオーケストラ・ピット

第 30 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：**歌劇「ドン・カルロ」（ヴェルディ）**

3 月 20 日（日） 17 時 30 分開場、18 時上映開始　（厳寒の 2 月はお休み）

文豪シラー原作の、高貴で感動的なヴェルディ最高の傑作悲劇。主役級 6 人の歌手は 1983 年当時望みうる最高の豪華キャスト。ドミンゴ、ギャウロフ、フレーニ、バンブリー、キリコと、若きフルラネットの共演は必見。レヴァイン指揮、メトロポリタンの豪華な舞台を楽しみましょう。

4 月以降、「椿姫」、「ドン・ジョバンニ」、「トゥーランドット」など新演出の名作の他、珍しい貴重な演目も予定。

あらすじ

【時と場所など】

　ギリシャ神話の時代、地上の森と冥界（黄泉の国）

【登場人物】

オルフェオ：　　竪琴弾き
エウリディーチェ：　　オルフェオの妻
アモーレ：　　愛の神
その他、羊飼い、ニンフ（精霊）、冥界の妖精

【第 1 幕】エウリディーチェの墓がある森の中

　竪琴弾きオルフェオの愛する妻エウリディーチェが毒蛇に足を咬まれて急死。オルフェオは月桂樹のある森の中の墓前に泣き崩れ、嘆きの歌**「愛する人をこれほど呼んでも」**を歌う。羊飼いやニンフたちの踊りもオルフェオの嘆きを鎮めることができない。

　ゼウス神たち神々がオルフェオを憐れんで愛の神アモーレを遣わし、アモーレはオルフェオに「冥界へ行ってエウリディーチェを地上に連れて帰ってよい。ただし、地上に連れ帰る途中、妻を決して見てはならない。見たら永遠に妻を失う」と伝える。

【第 2 幕】冥界の入り口と天上の楽園

　オルフェオが現世から冥界へと進むと、地獄の亡霊や復讐の女神たちが不気味に踊り狂っている。亡霊たちはオルフェオの行く道を阻み脅かす。オルフェオが竪琴を手に取り、**「もしわずかでも愛に悩んだ覚えがあるのなら」**と同情を訴えると、亡霊たちはオルフェオの見事な演奏に慰められ、願いを聞き入れる。

　オルフェオは静かで美しい楽園に到達。ニンフたちは幸せそうに踊っている。オルフェオは**「なんと澄みきった空」**と歌い、エウリディーチェの居所を尋ねる。ニンフたちはオルフェオの英雄行為を讃え、エウリディーチェを連れてくる。オルフェオは彼女を見ないようにして手を取って地上へと向かう。

【第 3 幕】森の中の洞穴とアモーレの神殿

　オルフェオは妻の姿を見ずに妻の手をとって何も尋ねるなと地上へと向かう。エウリディーチェは再会の喜びもつかの間、自分のことをひと目も見てくれない夫の態度を疑う。オルフェオは懸命に妻をなだめるが妻は**「なんと辛いひと時」**と歌い夫に顧みられない悲しみを爆発させる。オルフェオは必死の想いで試練に耐えていたが、愛する妻のさらなる懇願に妻の姿を見てしまう。その瞬間エウリディーチェは気を失う。オルフェオは深く嘆いて名曲**「エウリディーチェを失って」**を歌い自ら命を絶とうとする。そのとき再び愛の神アモーレが現れ、「よく耐えました。それで十分です」と言い、エウリディーチェに命を吹き込む。オルフェオとエウリディーチェは抱き合って喜び、愛の神を讃える。

　アモーレの神殿。オルフェオとエウリディーチェのまわりに羊飼いや森の精たちが集まってアモーレへの感謝を歌い、明るく優雅に喜びの踊りをささげる。

補足．オルフェウス伝説

　オルフェオとエウリディーチェの物語は、古代ローマの詩人ウェルギリウスの「農耕詩」第 4 歌（蜜蜂の章）で語られ、同じく古代ローマの詩人オウィディウスが書いた叙事詩「転身（変身）物語」の第十巻、「オルペウスの冥界下り」で紹介されている。

オルフェオ（オルペウス。オルフェウス、オルフェとも）は吟遊詩人で竪琴の名手。凶暴な野獣や森の木々さえも感動させた。母はムーサイ（ミューズ、文芸・音楽・天文など知的な活動を司る 9 人の女神）の一人で長女のカリオペーとされる。

エウリディーチェ（エウリュディケー）はニュンペー（ニンフ、精霊、下級女神）の一人で森の木に宿り樹木を守る。

アモーレ（エロース。クピードー、キューピッドとも）は愛（恋）の神。愛と美の女神アプロディーテー（ウェヌス、ヴィーナス）の子とされる。

参考資料

歌劇「オルフェオとエウリディーチェ」の版について

ウィーン版は 1762 年にウィーンの宮廷劇場（後のブルク劇場）で初演された作品でイタリア語版である。**パリ版**は 12 年後の 1774 年、パリ・オペラ座上演のために改作したものでフランス語版である。オルフェオ役のカストラートをオート・コントル（高い声のテノール）に改め、フルートの名曲**「精霊の踊り」**を追加し、オーケストラもオペラ座にふさわしい大規模なオペラに改変した。

なお、作曲家**グルック**（1714-1787）と上記経緯について、NHK E テレ「ららクラシック」の興味深い番組「王妃アントワネットが愛したオペラ」を、オペラ上演前に紹介する。

出演者等

ベジュン・メータ

エファ・リーバウ

レグラ・ミューレマン

ベジュン・メータは世界有数のカウンター・テナー歌手。インド系アメリカ人で父の従兄弟に巨匠**ズービン・メータ**がいる。
エファ・リーバウはオーストリアのソプラノ歌手。ザルツブルク音楽祭、スカラ座など世界的に活躍している。
レグラ・ミューレマンはスイスのルツェルン生まれ、まだ 20 歳代の新進ソプラノ歌手。
コレギウム 1704 および**コレギウム・ヴォカーレ 1704** は、指揮者の**ヴァーツラフ・ルークス**が 1991 年にチェコのプラハに創設したピリオド楽器を使用するバロック・オーケストラと声楽アンサンブル。

チェスキー・クルムロフの略史

城内最奥のバロック劇場（白い建物）、下はヴルタヴァ川

チェコ南部、ヴルタヴァ（モルダウ）河畔のチェスキー・クルムロフ（ボヘミアの川の湾曲部の湿地帯の意）の町と城は 13 世紀後半ボヘミア貴族により建設、発展したがボヘミア貴族が断絶。その後オーストリア・ハプスブルク家直下のドイツ系有力貴族の支配が続き、住民の大多数を占めるドイツ系住民が少数派チェコ人を支配。第 1 次世界大戦の結果ハプスブルク家の帝国が崩壊してこの町はチェコスロバキア領になったが、ナチの台頭でこの町を含むドイツ語圏地域はドイツ領に。第 2 次世界大戦後、町はチェコスロバキアに復帰、ドイツ系住民が追放されたため町は一時無人状態に。

城内バロック劇場

舞台装置も 1766 年当時のまま、現在も手動で操作する

17 世紀末、イタリア人建築家によりバロック劇場が設計されて城内に建てられた。正規の劇団員を 15 名抱え、シェクスピアなどの演劇を上演していた。18 世紀半ばドイツ系有力貴族の領主ヨーゼフ・アダム・シュヴァルツェンベルク公爵※の時代に、ウィーンの芸術家をいれて有名な劇場建築家ジュゼッペ・ガリ・ビビエーナの作品をモデルにして改装し、大規模な舞台装置を追加した。グルックの友人ジュゼッペ・スカルラッティやアントニオ・サリエリなどのオペラや、バレエ、演劇が上演された。19 世紀に入ると領主が居城をプラハの東、フルボカー城に移したため、城も町もすたれた。その後も上記のように歴史に翻弄されたため、劇場もそのまま放置されていた。20 世紀後半から、建物だけでなく、内装、舞台衣装なども修復が進んでいて現在も続いている。
※母親のエレオノーレ公爵夫人が彼を生むために狼の乳を飲んだため吸血鬼とされた伝説が伝わる。